



Title	生きること・学ぶこと・歌うこと ー岩波ジュニア新書『生きていくための短歌』を通してー
Author(s)	南, 悟
Citation	教育科学セミナー, 42: 75-84
Issue Date	2011-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/4869
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

生きること・学ぶこと・歌うこと

— 岩波ジュニア新書『生きていくための短歌』を通して —

南 悟

はじめに

1月29日(土)に関西大学教育学会に招かれて行った講演「生きること・学ぶこと・歌うこと」の内容にそって原稿をまとめてみました。

講演と原稿の依頼をお聞きした時、教育研究の専門家の皆様方を前にして躊躇しましたが、それでも私が31年間勤務した夜間定時制・兵庫県立神戸工業高校で出会ってきたたくさんの生徒たち、生きることが難しい子どもたちが困難な生活の中を前向きに生きようとしている話は、きっと皆様方のお心に届くのではと思ってお引き受けしました。

定時制高校は、ともすれば柄が悪い、勉強ができない、やんちゃな子が多いのではと思われがちですが、昼の学校では生きることが難しい生徒の避難場所であり、自己再生の場所です。不登校、ひきこもり、障害を持つ生徒、リストカットや病気で苦しむ生徒、中高年や高齢生徒、外国籍や日系人生徒、暴走族や荒れている生徒など、実に多様な生徒が居場所を求めてやってくる、まさしく命を支える学校なのです。これほど多様で生きることが難しい人間を受け入れる場所、学校は、定時制高校において他にありません。

今回お招きをいただいた玉田勝郎先生からは、ほぼ40年前の私の新人教員時代に、全国に影響を与えた解放教育運動の拠点でもあった兵庫県立湊川高校(定時制)の教員であった先生に、多くのことを教えられてきました。特に生活綴り方教育のことではたくさんの先達の書籍や教師としての課題・心構えなどを教えられて

きました。先生の口癖は、親の生活を見つめ子どもに寄り添え、しんどい子どもを見放さずにつき合えというものでした。40年を経てもまだ卒業させてもらっていないようで、今回の講演も私の実践を点検するためのものでもあるようです。

短歌授業のはじまり

今から約28年以前の事です。

久保木君は、休まず毎日学校に来て授業を受けているのですが、喋り続けてばかりで、周りの誰彼に話しかけています。その賑やかさは、授業の進行を妨げることが多く、何度注意しても、その場限りで、すぐに彼のペースで周囲を巻き込みます。私も、しびれを切らせて、「いいかげんにしろ」と彼の席まで詰め寄り、思わず襟首に手をかけてしまったのです。彼も「さわるな」と私の手を振り払いました。勉強に集中するように促しましたが、気まずい思いは消えませんでした。私の右手の指先に油の匂いが染み付きました。「久保木君、働いているんだね、何の仕事?」。彼は答えずに周りの生徒が、「鉄工所や、そんなことも知らないのか」。うかつにも私は、生徒が昼間何らかの仕事に就いているという事を、漠然と理解していました。そういえば、久保木君はいつも油まみれの作業服姿で、機械油の匂いをかすかに漂わせていたのです。

その後、嫌がる久保木君を説得して彼の働く仕事場を見学させてもらいました。その仕事場を訪ねてみて驚いたのですが、経営者の社長で

もある職人さんと2人だけの職場でした。運河沿いの古びた鉄骨スレート造りの、小さな平屋建ての、陽の光りの射し込まない薄暗い片隅の、裸電球の下で、黙々とフライス盤に向き合っていました。

私はこの光景を見て、思わず息を呑みました。学校では本当に賑やかで、授業の進行を妨げてばかりの生徒です。そんな、彼の学校での様子も、職場を見て初めて理解できたのです。若いエネルギーを仕事に注ぎ込み、その疲れを持って学校へ来るのです。学校へ来て若い同世代の仲間に交わってはじめて、気分転換がはかれるのでしょうか。靴の先から顔にいたるまで、油に汚れる彼を見ていると、つくづくそう思えてくるのです。社長さんの「一人前の職人です」という言葉が忘れられません。

そうした生徒の頑張りを、どうにかして生徒自身の手によって表現してもらおうと思い取り組んだのが短歌の創作でした。作文は誰もが嫌がり、詩は言葉の選択が難しかったのです。

そんな彼が、2年後の授業で初めて詠んだ歌です。

工場の 昼なお暗い 片隅で
一人向き合う フライス盤
久保木和幸(1985年)

フライス盤とは切削加工をする工作機械で、鉄の固まりを固定させておき、数種の回転する切れ歯で切削していくものです。

久保木君がこの短歌を作るまでには、2年の時間がかかっています。定時制高校生の多くは、自分が仕事をしていることを恥ずかしがり、隠すようにさえしていました。多くは、中学校の同級生が通う全日制の高校に行けなかった口惜しさを抱え、定時制高校に学ぶ自分に自信が持てないのです。それは、生徒だけではなく、朝早く私服で通勤する子供に、近所の目があるので、学生服を着て家を出るように諭すお

母さんの発言からも、生徒を取り巻く状況の厳しさがうかがえるでしょう。

もう1つ、短歌の創作授業を始めるきっかけを与えてくれたのは、ある教科書に『無名者の歌』という短歌教材があったことです。朝日新聞の「朝日歌壇」に投稿された無名者の短歌を歌人である近藤芳美氏が編集した本『無名者の歌』（岩波書店「同時代ライブラリー」所収）の一部が教科書に採用されていたのです。

一日の 乗務を終えて 洗車する
満天の星の下 われは小さし
小峰 文子

このような、無名の働く人たちの歌に生徒達の共感が寄せられました。「仕事の歌なら僕たちもつくれるなあ」との生徒の発言から始められました。

けれども、先にも述べましたが、生徒たちは仕事のことを恥ずかしがり、他人に知られたくないと思っていましたので、最初の頃は、趣味のバイクや遊びの歌が多く作られていました。

満月の 町に爆音 ひびかせて
今日も走るぜ 暴やんバイク
松下 隆一(1985年)

働く中から

好奇心 始めた現場 しんどいが
メットかぶって 鉄筋運ぶ
沼田 歩(2009年)

昨春入学して現在2年生に上がってくれている女子生徒です。建築現場の鉄筋工として、六月から働き始めて6ヶ月間、新築マンションの完成まで続けました。小さな体で、いつまで続くのか心配しましたが、厳しい夏の暑さも、熱中症で1日欠勤しただけで乗り越え続けました。

中学校では、荒れた生活を送り、警察、家庭裁判所の世話になって、一時保護所から児童福祉施設での生活が1年半も続きました。その頃出会った定時制神戸工業高校の女子生徒の勧めで、人生を立て直そうと同校に入学しました。

両腕に刻まれたタバコの焼け跡の「根性焼き」の数の多さ、色白の素肌を覆い隠す焼け跡が、彼女のこれまでの生き辛さを物語っているようです。入学した頃は声をかけてもまともにとりあってくれませんでした。

幼少期、両親の期待を背に、塾に通い、家庭教師につき、ピアノ教室と水泳教室にも通っていました。勉強が得意な彼女ですが、中学生になった頃に、このまま、高校、大学へと進む人生に疑問を持ち始め、学校からはみ出している生徒たちに共感し行動をとともにし始めたといいます。

この仕事は、6月に求人情報誌で応募して採用になりました。毎朝、5時50分の電車に乗って、事務所に向かいます。会社の車で建設現場には8時到着です。ラジオ体操から始めます。

鉄筋の種類は、長さがだいたい10メートル、一番細いのが径10ミリで、最も太いのは35ミリです。男性の成人なら2～3本を肩に乗せて狭い足場の上を選びます。沼田さんは就業規則もあって、1本でもいいそうです。マンション建設の壁や床に鉄筋を張り巡らせて、鉄筋と鉄筋をハッカーという工具を用いて結束線で締めていく作業です。そこにコンクリートが流し込まれていくのです。同時期に入った若い男性は3人とも数日間で辞めたそうです。彼女が辞めなかったのは、人生の立て直しと、女だからと馬鹿にされたくなかったというものです。

次の歌もあります。

朝仕事 夕方学校 夜乗道
眠たい毎日 気合で乗り切る

2年への進級を控えたある日、「先生、とうとう取ったよ！」とパスケースから小さな免許証を出して見せてくれました。ホームヘルパーの免許状です。鉄筋工として働いた給料でヘルパーの学校に通い、念願の資格を取得したのです。彼女の表情が弾けていました。

昨年春から、市内の老人福祉施設で働く彼女は、力持ちと優しい人柄からお年寄りの人気者です。

職場訪問した時、生き生きと立ち働く彼女の姿に接して嬉しい気持ちになりました。卒業までの3年間の現場経験で「介護福祉士」の受験資格が取れると目を輝かせていました。

「自暴自棄になっていた私がこの学校で助かった」と、最近の気持ちを詠んでくれました。

オムツ替え 糞尿まみれ もう嫌だ
ありがたい言葉 また頑張れる

(2010年)

ひきこもりから定時制高校へ
同じく現在2年生の男子生徒です。

不登校 働き学ぶ 夜学へと
優しい友と 卒業めざす

食堂の 厨房仕事 洗い場で
流れる食器を 必死で選別

山口 雅輝

山口君は、中学校の1年生の2学期から不登校になり家に引きこもっていた15才の少年です。いきなり朝7時に起きて、夕方まで市役所の食堂で働き、帰宅が夜の11時になる厳しい生活リズムがこなせることが不思議に思えます。

彼の幼稚園時に両親が離婚して母子家庭になり、祖母と姉を含めて4人家族です。中学校に行けなくなり始めた頃は、学校に行くように強く勧めるお母さんや先生との葛藤が大変だった

そうですが、自分一人の世界が居心地良かったというのです。昼夜逆転の生活で、ゲーム浸けのひきこもり生活も、定時制高校入学と同時に、自分から立て直そうと考えたと言います。

初めての給料、半月分4.2万円から1万円をお母さんにプレゼントしたそうですが、15才の少年にそのようなことをさせる力が定時制高校にはあるようです。

2010年3月16日には、「なくそう！子どもの貧困全国ネットワーク」が『希望するすべての生徒に定時制高校進学を！』という国会での院内集会を持ち、『生きていくための短歌』を出版したことで私と生徒2人がゲストとして招かれ定時制高校の存続と拡充を訴えました。山口君と友だちの田中君がいずれも有給休暇を取って参加し、文科省政務官や国会議員、文科省・厚労省事務官の前で、中学時代の不登校を経て定時制高校で働き学ぶ生活の中から自分を取り戻していく体験を話し、「定時制高校をなくすよりは増やして下さい」と訴えました。

鉄工所で働く田中君の歌です。

鉄工所 作業服に 身を包み
ボール盤と 毎日格闘

田中 正充

国会からの帰途、山口君と田中君は憧れのアキバ（秋葉原）で半日過ごしました。有給休暇を取ってまで東京に駆けつけてくれた大きな理由がここにあったようで、ひきこもり生活で身についたゲームおたくのメッカ訪問がようやく実現したのです。

レジ打ちで お金もらい忘れて 怒られて
パートさんに 慰められる

北川 一樹

同じく中学時代の不登校を経て神戸工業高校に入学した生徒が、初めてのアルバイトの中から詠んだ歌です。失敗は誰にもあるからとパー

トさんに慰められ、夕方の時間がくると「後は私がしておくから頑張って学校へ行きなさい」と、励まされながら仕事と学業の両立を続けています。このような環境の中から働く仲間に労りの気持ちが持てるような人間になれるのです。

一年生初めての歌

俺は今 大工の華咲く 十五才
足場上がり 破風板を打つ

山崎 裕太

大工の華咲くというのが彼の誇りを表しています。15歳。「華」の漢字が難しいので、図書室で漢字辞典で調べて書いてくれました。破風板というのは、屋根の三角の交わる部分と外板の壁を打つところ。この子はやんちゃの不登校で、中学校へは行けていないですが、神戸工業高校に入学して大工の仕事に出合って、自分に誇りを持ち始めました。「華」という漢字が書けないので、皆から「鼻でいいやろう」といじられながら、図書室で調べて作ってくれました。

黒板屋 根性無しかと 親父に言われ
辞めるに辞めれぬ 時給五〇〇円

中原 悠詞

兵庫県の学校の黒板はほとんど彼の会社で作っています。時給500円。今最低賃金で780円ほどですが、それを見てクラスの子は誰もが、「そんな500円みたいな、あほみたいな、辞めてしまえ辞めてしまえ」と言われながらも、「辞められへん、職人は給料よりまず技術身につけることや」と、15歳ですでに職人気分ですり通してくれています。

ある日、学校に納入された黒板の裏面に彼のサインがあって、それを見たクラスの誰もが「へえっ、すごいなあ」と尊敬の眼差しを見せ

ていました。

足場にて 可愛い娘みとれ 踏み外し
番線からまり ニッカびりびり

皆森 淳

この現場は神戸の私立女子高校の外壁塗装の仕事です。キョロキョロキョロキョロして、仕事が手に付きません。教室には女の子ばかりです。親方にたびたび頭をはたかれながら、「ええ加減にせんかい、おまえ何しに来とんねん。女の子見に来とらんちゃうやろ！」けれども気になって気になって、もうつい見とれてしまって、足場から落ちかかって、番線の太い針金がニッカボッカにひっかかってビリビリ破れたという時の歌です。ある日の授業に遅れてきた彼が、「先生、今日、大変やった」と大きな声で説明しました。それによると、足場の上から下校途中の女子高生の集団にペンキのついた刷毛を落としたというのです。幸い当たらなかったものの、可愛い女の子が拾ってくれ、ラッキー、この時話しかけられると思った瞬間「おっちゃん、はい」と手を差し出したそうです。「俺、16歳やで」。そしたら皆が、「現場出たらみんな作業服でヘルメットかぶって、おっさんに見えるねん。そんなもんや。」と大笑いしながらも慰めていました。そういう嬌笑、笑いが教室の中に生れてきます。

34才の再入学

ある日の短歌作りの授業での出来事です。

すでに短歌を半分書いて「遠き日に手放したりし高卒の」で腕組みしている尾関さんの机に巡り着きました。尾関さんは34歳の生徒です。この世の苦労を一身に背負い込んでいるような表情の青年です。私は、彼の短歌と表情に目をやりながら、どのような思いが込められているのかを聞いていきます。次々と驚くべき彼の苦労の人生が語られ始めたのです。母子家庭の長

男の彼は、大阪の全日制高校でアルバイトをしながら、働くお母さんを助け、弟妹2人との4人家族で生活してきました。ところが、苦労を重ねたお母さんは、彼が高校3年の秋に、病気で倒れ亡くなりました。親戚の人や民生委員さんたちは、兄弟に施設の入所を勧めたのですが、小学生の妹が「お兄ちゃんと離れるのん嫌や」と泣きじゃくり、兄弟が離れ離れになるために断ったそうです。そのために、彼が高校3年生の学校生活を諦め退学しました。退学の相談を担当の先生にしたところ、「そうか、がんばれ」と終わったそうで、進学校の先生には生活支援の方途は見えていなかったようです。

弟と妹の3人の生活を支えるために、生活保護を受けながら、彼が働きつめてきたそうです。そのような生活が15年間も続き、ようやく妹が結婚し、弟も独立してくれたので、これから自分の生活をやり直そうと、1年生から入学し直しました。私と尾関さんの話に教室中が静まり、誰もが耳をそばだて聞き入っています。私は、彼のこれまでの苦労を知らされ、思わず落涙していました。

そうして出来上がった歌です。

遠き日に 手放したりし 卒業の
二文字追って 夜学に通う

尾関 浩一

勉強の熱心な彼は、在学中に大学卒業生でも取得が難しい「情報技術検定一級」と「システムアドミニストレーター」の資格を取りました。苦労の多い生活の中から学び働く尾関さんの姿は、夜間定時制高校生を確実に励ましていました。

シンナーも暴走もやめ

シンナーも 暴走もやめ 一年生
三回目やけど 卒業するぞ

上野 毅

留年や退学を繰り返し、三度目の一年生をやり直そうと入学してきた上野君の初めての歌です。入学当時は、なかなか授業に入らず、いつも校門周辺や近所の公園などで、仲間大勢でたばこを吸ったりバイクを乗り回したり、シンナーの吸引もなかなか止められなかった生徒でした。教室へ入るよに促すと「うるさい、眼鏡割ったろか!」と言うようなありさまで、このような状態が長く続きました。私たちも見放さず付き合いましたが、学校どころではありませんでした。

茶髪や金髪に染め、ピアスやカラーコンタクトで自分を飾る彼は、どこかしら寂しげでさえありました。シンナーと暴走行為で三度警察の世話になりました。

その頃の自分の事を、7年後の卒業作文にこのように書いてくれています。

「入学した頃は、学校にも行かず、単車に乗って、暴走や、シンナー、〇〇、など、悪いことばかりして遊んできました。そして、警察に捕まり、それが2度3度になり、もう最悪な人生を送っていました。あの頃は、カツアゲをして、警察に追われると、笑いながら逃げていたほど、最悪な自分でした。」

そのような彼に転機が訪れたのは、彼女の支えと励ましです。3度目の1年生を始めた頃からは、彼女も度々学校へ来て、教室でも彼を見守るように共に授業を受けていました。「家でも学校でもずっと側に居られたら自由がない」と不満な様子でしたが、「しんぼうが肝心や」とクラスの仲間の支えも大きいものがありました。

2年生で詠んだ歌です。

一九才 夜学四年目 この冬は
わが子が生まれる 待ちどおしいなあ

彼女の妊娠と出産によって、彼の顔付きもしっかりしたものになっていきました。仕事も焼

肉店から、神戸港の船舶関連の工場に移り、鋼線のワイヤーを手で編む作業に従事しました。神戸港の荷役や船の係留に使うワイヤーです。私も、彼の仕事の様子を目の当たりにして驚いたのですが、鋼線のワイヤーなどは、てっきり器械で編むと思っていたのですが、人間の手による手編みのほうが強いということを知りました。鋼の線を一本一本、鉄の棒状のものを手作業でより合わせていくのです。ですから、彼の10本の指先は手袋の軍手をしているにも関わらず、1年中、皮がめくれて痛々しいものです。

3年生で詠んだ歌です。

ワイヤーの手編み作業 しんどいが
俺の稼ぎで 妻と子支える

上野君は、彼女や友だちの支えと励ましで、7年間かけて卒業してくれました。

彼の卒業後のある日の授業で、例年通り1年生に先輩の短歌を紹介していて、上野君の短歌もありました。すると、須波君が「それ、僕の会社の係長さんの歌や、上野さんもそんな時代があったんや」と驚きの声を上げていました。翌日、会社でこのことを話題にすると、「俺にもプライベートがある」と照れながらも、定時制高校をなんとしても頑張るようにならしたそうでした。

還暦過ぎて学ぶ

時は過ぎ 悔いが残りし 無知な俺
還暦過ぎて 夜学に通う

豊永 文一(2009年)

62歳の高校三年生豊永文一さんです。彼もまた働き続けてきた苦勞の多い人生を詠んでいます。60歳の還暦を迎えた時に定時制高校に入学しました。

2008年の春、入学試験の面接試験の部屋に緊

張気味の豊永さんがいました。私が面接官でした。「無知な私ですが勉強したいです。」「6歳の人生を重ねてこられた豊永さんを知りだとは思いませんよ」。少し緊張も和らぎ、私は豊永さんに、若い生徒たちの人生の励みになるので、ぜひ頑張ってくださいと激励しました。「はい、がんばります」と笑顔で答えてくれました。

合格発表当日、豊永さんは奥さんと一緒でした。自分の番号を見つけて大喜びです。番号の前で撮影を頼まれた携帯写真の画面に笑顔が弾けていました。その時に分かったことですが、豊永さんは定時制高校受験のことを奥さんと子どもさんたちには内緒にしていたそうです。この日は合格発表が不安で、奥さんに行き先を告げずに同行してきてもらっていました。生まれて初めての高校受験、緊張と不安は大きかったことでしょう。

豊永さんのふるさとは、奄美諸島の徳之島です。自然が豊かで、人情味あふれる南の島です。単身神戸で働くお父さんを頼って、お母さん豊永さんと弟妹2人の家族がやってきました。造船所の下請けで働くお父さんの収入だけでは生活が苦しく、長男の豊永さんは中学を卒業後、弟妹2人を高校に行かせる学費を稼ぐために働いてきたのです。

その頃は、中卒の労働力は「金のたまご」ともてはやされていました。お父さんに就いて造船所で大きなタンカーなどの船を作る仕事からはじめ、鉄鋼の組み立てや溶接が中心でした。仕事は誰にも負けにくい頑張り、1988年には「奄美工業有限会社」を設立し、造船所の下請けの資格も取りました。

仕事の出来る豊永さんですが、ひとつだけ悩みがありました。数学が苦手なために、図面や材料の調達などの計算も他人に任せ、いつも恥ずかしい思いをしてきたそうです。ある日、何とかして分数の計算を身につけたいと考えて本屋さんに行きました。そこで出会ったのが、「ド

ラえもん算数おもしろ攻略」という漫画の本です。宝物でも手に入れた気分で、わくわくした気持ちになったそうです。

それからは、暇を見つけては分数の引き算、足し算、割り算を何度も繰り返し読み、例題に取り組みました。問題が解けるようになった時は、「やったあ！」と飛び上がったそうです。この本は計算式などの書き込みが一杯で、ページもよれてぼろぼろになるほど使い込んでいました。

この自信が、定時制高校への入学を後押ししました。教室ではいつも最前列に座り、体育の授業でも誰にも負けない動きを見せ、無遅刻・無欠席を続けています。

2009年1月の学校行事、「震災激励集会」の場で、豊永さんは思わず涙を流しました。

豊永さんは、苦勞の多いこれまでの人生を振り返っても、涙を流す経験はあまりありませんでした。

壇上に立つ1年上の先輩、電気科2年の西山由樹さん（後出）が、震災で両親を亡くして後の辛い過酷な人生を前向きに生きようとする話に思わず落涙し、生きる勇気をもらいました。

豊永さんも、この時から自分の震災体験を振り返りました。最初は、家族にけが人もなく、何の被害も無かった自分が「心苦しかった」そうです。豊永さんは、神戸の町の復旧工事を最前線で支えてきました。壊滅状態の造船所の大型クレーンや水源地の復旧作業。神戸市民の憩いの場である海釣りができる遊歩道の護岸も海に落ちていました。地下鉄駅の陥没復旧作業では、余震に怯えながら天井を持ち上げるジャッキアップ作業に従事しました。振り返ると、危険な現場作業の連続でした。

私は、豊永さんに震災の体験を短歌に詠むように勧めました。何も辛い体験が無いと断られ続けましたが、西山君の前向きな姿にも励まされ、震災の復旧工事に関わり、神戸の町の復興

に関われた自信と誇りを詠んでくれました。

震災で 壊れた街に 灯をともし
俺の死に場所 神戸と決めた
豊永 文一(2010年)

両親の分まで生きる

震災で 止まった時間 今日からは
変えて見せるぞ 名に飛びぬよう
西山 由樹(2009年)

2009年1月14日の夜、神戸工業高校の「震災
激励集会」で、全校生徒の前に西山由樹君が立
ちました。

震災で、当時39才の父と31才の母を失い、荒
れていた生活から立ち直る決意を込めて、作業
服姿で作文を読みました。

「両親に甘えることも、素直な気持ちも持て
なかった」「もう悪いことはしないと自分に誓
い、卒業したい、親の分まで生きたい」

あの日、小学校3年生だった西山君は、文化
住宅の2階の二段ベッドに寝ていて、大きな揺
れに目覚め、下段の弟と両親の名前を呼びまし
た。両親が寝ていた1階は2階に押しつぶされ
ていたのです。隣に住んでいた祖父が、孫2人
を潰れた家の外へひっぱり出しました。

家の前の道路で毛布をかぶって寒さに震えて
いると、うっすらとしらみはじめた光で、がれ
きになった玄関先に自分の黒いランドセルが見
えました。

数日後、どこかは覚えていないけれども、お
寺で棺の中の両親と対面したのが最後でした。

それからは、親戚の家を弟と2人で転々とし
ました。家族のだんらんがはじまると、いつも
席をはずれ、「なんで僕らを残して死んだんや」
と、声を押し殺し泣いていました。

叔母が飼っていた子犬を抱いて公園で夜を過
ごすことも度々でした。

転校先の小学校で映画「火垂るの墓」を見ま
したが、両親を亡くして生きる清太や節子のよ
うには、自分は素直になれないと感じ、卑屈な
気持ちで周りに当たる自分が嫌でした。

半年後、大工の祖父が元の場所に自宅を再建
し、祖父母と弟の4人で暮らし始めました。「お
父さんとキャッチボールする」「お母さんと買
い物行く」。そうした、子ども同士の話題に入
れず、「なんで僕だけ」と心が曇りました。

中学では、茶髪にピアスをしてバイクを乗り
回し、パトカーに追われながら暴走し祖父母を
困らせていました。暴走仲間が自宅に来て、祖
父母に「金を出せ」と恐喝し警察が駆けつけま
した。「あいつ親おらんからな」。友だちから理
由を聞いて、無性に腹が立ち、結局卒業式にも
出ませんでした。

卒業後、普通科の定時制高校に通い、朝早く
から屋根のふきかえの仕事に就きました。ぎこ
ちない彼に周りのおじさんたちは優しく教えて
くれたのが嬉しく、生活費を稼ぐためにもがん
ばりしましたが、1年半働いていた会社が倒産し
たのです。

次の仕事がなかなか見つからず、生活費に困
り、修学旅行の積立金を取り崩して、3年途中
で退学しました。これからの人生をどう生きる
か、先が見えなくなった時に、がれきの中の黒
いランドセルのことが思い出されたのです。亡
くなった両親が、勉強はするんやで、と言っ
てくれたような気がしました。

父は柔道が強く、よく片腕で弟と2人を持ち
上げ遊んでくれ、お母さんはいつも優しくった
のです。

2007年の春、神戸工業高校の電気科に入学し
ました。22才の西山君は、面接と作文だけの「成
人特例入試」を受け、私が面接官でした。両親
が震災で亡くなったことを知り、「頑張るんや
で」と声をかけました。

給食会社の配送運転手の仕事をしながら学校

は続けていました。2年生のある日、西山君が1年生を殴り大怪我をさせる事件が起きました。殴った理由は、西山君の誤解からきたもので、1年生数人が談笑して大声を出したことを、自分が馬鹿にされたと聞き間違えたのです。

担任と私が家庭訪問をすると、西山君の祖母は「申し訳ありません」と、恐縮のあまり小さくなっておられました。担任が、目標を立てて電気工事士試験を目指すように励ましました。その後、けがを負わせた相手とは、治療費と慰謝料を西山君が支払い、和解しました。

震災犠牲者の名前が載った本の西山君の両親の名前を指差し、「両親は悲しんでいるよ」と、震災体験を書くように勧めました。何度頼んでも、「俺なんか、見本にならん」と断られ続けました。震災を知らない生徒たちに体験を話してほしかったのです。卒業生たちが残してくれた震災体験の作文と短歌を何枚か渡しました。

2008年の2学期、西山君は、努力の甲斐あって、第二種電気工事士の学科試験に合格。私も嬉しくて、「生活体験発表会」に出るように勧めました。1ヶ月後、原稿用紙3枚半の作文を受け取りました。

図書室の机で彼と向き合い、作文に目を通しました。読み進めて行くうちに、彼の辛い震災後の生活を知り、涙が止まりませんでした。「よく生きてきたなあ、これからも前向きに」と言ったまま声が続きません。けげんそうに黙っていた彼も、「神戸工業高校にきて良かった、がんばる」と言ってくれたのが嬉しかったです。

9月中旬にあった神戸市内の「生活体験発表会」には、学校代表として舞台に立ち、「西山君頑張っているから」とクラス仲間の応援もありました。

そして、翌年1月に控えた「震災激励集会」に向けて、短歌を詠みました。

父と母 恨んだ日々は 何処へやら
今では父の 分まで生きる

いつまでも恨んでいてはだめだ。そして次の歌を詠もうとして、初めての子ども「由樹」の名前に込めた父の思いを、祖父が教えてくれたことを思い出しました。

「自由に生きろ。その分大樹のように大きく根を張れ」。震災後から、両親を恨んで祖父母に心配ばかりかけてきた人生をやり直そうという思いを歌に込めました。

14日の集会では、作文を読み終え、力強く短歌を二回朗読しました。生徒職員から大きな拍手が沸き起きました。

西山君は現在4年生でもうすぐ卒業です。昨夏には念願の「二種電気工事士」の資格を取得し電気工事店で働いています。

最近の歌です。

人間の 死ぬより生きる 辛いこと
大きな根を張り 負けずに生きる

(2010年)

生きることは死ぬより辛いというのです。最近の落ち着いた生活と彼の成長ぶりにを見て、もう大丈夫だろうと私の慢心がありました。それでも、大きな根を張って生きていくとも言ってくれているのです。

おわりに

小さな、目立たない存在である夜間定時制高校生の営みを綴った拙著『生きていくための短歌』にたくさんの反響が寄せられています。NHKテレビ総合やBSハイビジョン番組の全国放送、短歌の授業を教室から実況放送したMBSラジオ、全国紙や各地の地元紙での新聞紹介やいろいろな雑誌紹介など、定時制高校と生徒たちの姿を積極的に取り上げてくれています。

映画監督の山田洋次さんからは「学校Vはこれだ！」と激励をいただきました。本名で登場してくれた生徒・卒業生からの前向きな評価と無数の見知らぬ人々からの共感が嬉しいです。

定時制高校の統廃合が進む今、その政策の見直しを求めて行くためにも、引き続き働きながら学ぶ生徒たちの営みと定時制高校の持つ教育力を紹介して行きます。